

自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成(2年次)

～他者と関わりながら、自ら学びを進め深める方略の研究～

嶋田 善行

Yoshiyuki SHIMADA

概要

1年次研究では、副題を「自己調整的な知の構築へとつなげる方略の研究」とし、自己をメタ認知しモニタリングしながら学びを進めることのできる生徒の育成を目指して、プロジェクト型の学習活動を設定した。その結果、生徒が自己課題をスムーズに設定し、それにしがたって自らが学びを適宜調整しながら進行させることができた。また、必要感や充実感のある、オーセンティックな学びが生じたと考える。2年次研究では、このプロジェクト型の学習活動をさらに一歩進め、各フェーズにおける「問い」をより洗練させていく。また、それぞれの言語活動場面において、他者との対話場면을数多く設定し、さらにその対話に意図をもたせることで、より質の高い学びを創出できると考えている。

キーワード：プロジェクト型の学習、自己調整、本質的な問い、他者との対話

1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)の総則編には、学習活動の質を更に改善・充実させていくための視点が示されており、全ての教科等において共通に「単元(題材)など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。」とした上で、とりわけ国語科においては、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」*1としている。

さらに、石井英真(2017)は、「現代社会においては、『正解のない問題』に対して最適解を創る力を育てることが課題となっており、そうした力は実際にそれを他者と創る経験(知識構築学習)なしには育たない」*2としており、他者と最適解を創る際に用いられるものの多くは、当然のことながら言葉である。

これらを合わせて考えると、言葉を用いて自らの思いや考えを深めるための大きな条件として、単元等の「まとまり」という仕掛けづくりや、他者と知識を構築するプロセスが重要であるということが言える。

2. 生徒の実態(1年次研究の成果と課題)

本校国語科の1年次では、どのような方策を打てば「知識発見から知識構築のプロセス」*3を辿ることができるのかということを試行錯誤した。

このプロセスを遂行する際、最も効果的であると考えたのが「プロジェクト学習」の理論であり、手法である*4。

プロジェクト学習の各フェーズを本校国語科なりに整理し直し、単元の学びを組み立てることで、生徒が自己課題をスムーズに設定し、それに向かって学びを進行させることができた。自己課題の設定は、うまくいけば学びの必要感や充実感へとつながる。また、そうした感覚を抱きつつ進む学びは、オーセンティックで深いものになると考えられる。

しかしながら、以下のような課題もある。

- ・プロジェクト学習の手法が確立し切っておらず、十全に機能する単元が多くない。
- ・単元における対話がどのように機能し、個別の学習形態とどのような差異を生んだかが明らかになっていない。

以上のことから、単元内における個別の学びを確実に結び付けることや、他者との対話が生徒個人にもたらず学びの成果について深く追究することが肝要であると考えられる。

2. 1. 目指す生徒像

本校国語科では、以上の課題や求めを踏まえ、2年次研究の目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・単元のつながりを実感し、現在の学びを次の学びへと昇華させることのできる生徒
- ・他者との質の高い対話を通して、自らの学びを深めることのできる生徒

3. 研究主題及び副題

生徒の学びの向かう先は、あくまで社会生活のレベルにおいて活用できる力を身に付けることである。つまり、思考や想像・表現等によって自分の考えを形成するとともに、異質な他者と共に知を構築することが、育てたい資質・能力の一つであり、社会生活の場面においては、状況に応じて立ち現れてくる問題に対し、他者と共に新しい考えを産出できるようになることを目指す必要があるということである。

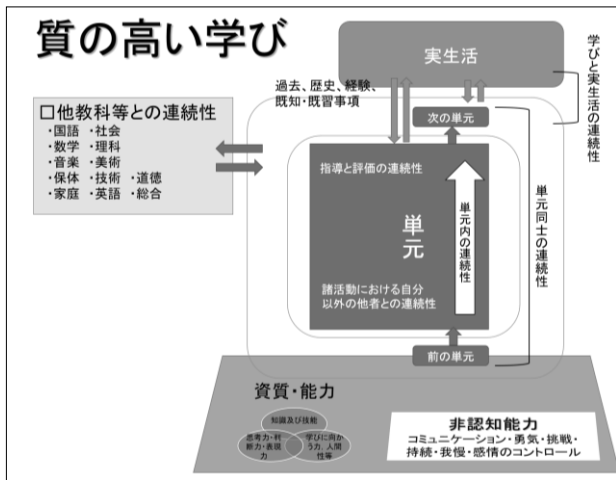
以上のことから、本校国語科の2年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成(2年次)
～他者と関わりながら、自ら学びを進め深める方略の研究～

4. 研究の内容と方法

本校の2年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、様々な側面から「連続性」というものを考えることが重要であると捉えている*5。

本校研究の構造図は以下である。



本校2年次研究の構造図

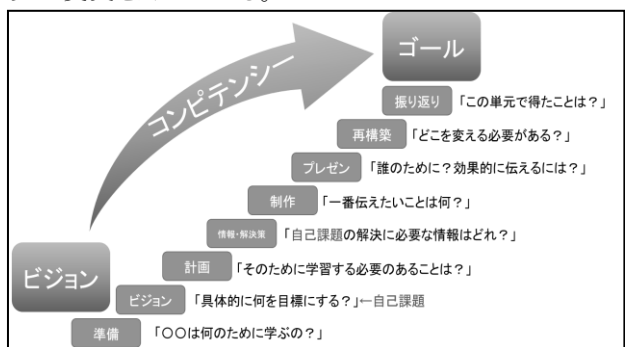
この中で、本校国語科では、特に「単元内の連続性」及び「諸活動における自分以外の他者との連続性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. プロジェクト型の学習活動及び「問い」の設定

前述の「単元内の連続性」を実現させるための手立ての一つとして、単元をつくる際にプロジェクト学習の手法(例えば、鈴木敏恵(2012))を用いることが有効であると考え*6。「プロジェクト」とは、ビジョンや必要感に基

づいて設定した、ある目的(ゴール)を果たすための構想や計画のことである*5。また、プロジェクトは一人で完結するものでなく、同じ志を持った人間が、チームで目標に向かうものである。この「チーム」とは、学校教育の文脈でいえば、主として同じ教室にいる仲間である(この際の学びにおける他者との対話については次項で述べる)。プロジェクトの特徴やセオリーを学習に生かしたものが本稿で述べるプロジェクト学習である。

さらに、このプロジェクト学習における各フェーズには、それぞれ適切な「問い」が必要である*7。この「問い」については、1年次研究においても理論構築し実践したところであるが、そこで生じた課題を踏まえ、以下のように少々変更を加えている。



プロジェクト学習を土台とした単元の流れと「問い」

この流れを各単元につくり、それぞれのフェーズにおいて確実に力を身に付けていきたいと考えている。なお、各フェーズにおいては、以下の力をそれぞれ身に付けることができると想定される。

準備	課題を発見する力
ビジョン	目標を設定する力
計画	戦略的に計画する力
情報・解決策	必要な情報を見極める力・発想力
制作	追究し、わかりやすく表現する力
プレゼン	コミュニケーション力
再構築	論理的に表現する力
振り返り	ゴールから振り返る力、次を見通す力

このように、プロジェクト学習の手法を基本として、そこに適切な「問い」を用い、内省的に自問自答を繰り返しながら学びを進行させることで、おのずと単元内の学びが連続性を帯びていくものとする。

4. 2. 他者との対話による知の構築

本校国語科では、前述のプロジェクト学習の各フェーズにおいて、適宜個々の学びを深めるための「他者との対話」を充実させることが重要であると考えている。そして各フェーズにおいて行われる話合いは、いわゆる話

型等を含めた「型」だけではなく、対話の本質を突き詰めていく必要がある。

例えば、「ことばと学びをひらく会」(2019)では、「対話における『具体像』については、『①話題や問題をともしている②異なる立場の他者がいる③互いにかかわり影響し合う④偶然性に満ちている——の4つの要素が前提条件で、その条件下で自己を成長させる学びである』⁸⁸としている。

さらに、多田孝志(2019)は教室における他者との対話を「話し合いの一形態ということではなく、より広い概念でとらえ、多様な他者とかかわり合い、新たな知恵や価値、解決策などを共に創り、その過程で良好で創造的な関係を構築していくための言語・非言語による表現活動」⁸⁹であるとしている。

ここに共通して言えることは、対話における「他者」とは、あくまで自分とは異なる立場の一異質な一他者である必要があり、またそれらが言語や非言語を介して「関わり合う」という行為そのものも重要であるということである。また、そうして捉えた対話こそが、質の高い対話であると言える。



他者との対話による知の構築

プロジェクト学習の各フェーズにおける個々の学習活動の中に、上の図に示した流れを意図的に、また数多く設定し、考えを構築したり、異なる考えに出会ったり、考えを広げたり深めたりさせることで、学びの質を高めていくことが理想であると考えます。

5. 実践と考察

『私の提案』を発表しよう！(A話すこと・聞くことイ・ウ)

5.1. 単元の構想

本単元における実践を行うにあたり、第2学年の生徒

は、他者に向けて話すことに関して、以下のような意識があることがわかった。

項目	割合(%)
①理由や例などを挙げながら話すことができる。	34.0
②事実と意見を区別して話すことができる。	34.0
③根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫することができる。	29.0
④資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現できる。	40.0

※4件法により100名にアンケートをとった結果。最も肯定的に答えた生徒の割合のみを上に表示している。

以上の結果から、事実と意見を区別して述べることは概ねできるものの、根拠の適切さに注意しながら話を構成しようとする意識に少々課題があることが見て取れる。また、資料や機器を用いることについては得意であるとする生徒が多いため、それらの特性を生かした学習活動が展開できると考えた。

本単元では、自分の立場や考えを明確にしてプレゼンテーションを行う活動を中核に据えている。その活動では、自分の身の回りのことや社会における様々な問題に目を向け、状況を改善するための提案をする。立ち現れては消える音声言語の特徴を考えた時、いかに明確に根拠を示すか、そしていかに話の構成をまとめるか、その方法が肝要であると考えた。その際の手立ての一つとして、ICT機器を有効に活用することも重視することとした。

また、単元の学習にあたり、『私の提案』を発表しよう！という言語活動を設定した。そうすることで、伝える目的や必要感を抱きながら活動を進めることができると考える。なお、本単元の指導では、以下の2点の工夫を試みた。

- ①プロジェクトシートを用いた単元の学びの可視化
- ②ICT機器を活用したグループおよび全体における協働場面の設定

プロジェクト型の学習プロセス並びに各フェーズにおける「問い」については、先に示した通りである。本単元においては、その学習過程全体を生徒自身が可視化できるよう、「プロジェクトシート」を用いることとした。

また、異なるテーマを設定している他者どうしが効果的に対話できるよう、ICT機器の活用を考えた。具体的には、Googleスライドを用い、より視覚的に発表や交流を行えるようにしている。

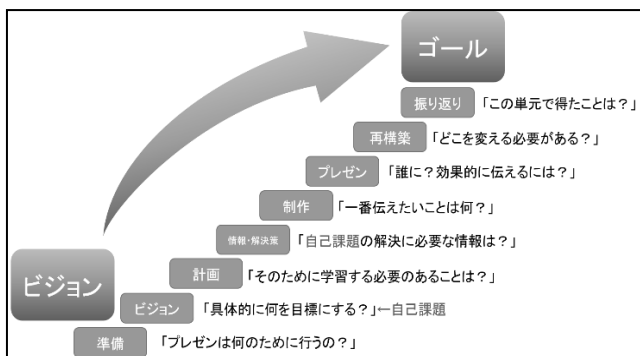
なお、本単元の指導計画は以下である。

時	学習内容	評価規準
1 (本時)	○他者のプレゼンテーションを分析する ○単元の課題を知る 『私の提案』を発表しよう！ 【工夫②】	思 態
2	○プロジェクトシートを用いて単元の学習の見通しをもつとともに、自己課題の設定を	思 態

	する	【工夫①・②】	
3	○プレゼンシートを用いて、プレゼンテーションの計画を立案する ○情報収集を行い、プレゼンテーションの準備をする	【工夫①・②】	知 思 態
4～ 6	○プレゼンテーションを作成する	【工夫①・②】	知 思 態
7	○グループでのプレゼンテーションを行う	【工夫①・②】	知 思 態
8	○全体での発表を行う(各グループの代表者) ○これまでの学習の振り返りを行う【工夫①・②】	【工夫①・②】	思 態

本単元は、プロジェクト学習のプロセスに基づいて構成した。本校の1年次研究においても、「目標設定、情報の獲得、戦略に即した追究、プレゼンテーション、再構築」というプロセスで学ぶことで、効果的に学習が進められることがわかったためである。また、プロジェクト学習の各段階では、精選した「問い」を投げかけている。

本単元における学習のプロセスと問いは以下である。



なお、各学習のフェーズにおいては、その都度問いに対する答えを前述の「プロジェクトシート」に記述させるよう心掛けた。そうすることで、個々の生徒が自分のすべきことをその都度考え、自分自身でそれを可視化することができる考えた。

また、以上のフェーズの中で「プレゼン」「再構築」において、協働場面を位置付けた。そうすることで、単元のゴール時における価値の共創造(本稿「4. 2. 」)が生じると考えたためである。

このプロジェクトシートの記述や協働場面における学びの様子等を含め、授業の細かな実際については以下に述べる。

5. 2. 授業の実際

本単元は、「よいプレゼンとはどのようなものか」ということを考えるところからスタートした。1時間目の学習のプロセスは以下の通りである。



このような学習のプロセスを通して、プレゼンとは一体どのようなものであるかを全体で確認し、さらに「よいプレゼン」の要素を全体で共有することで、ゴールへの見通しを明確にもたせることができたと考える。

次の2時間目では、プロジェクトシートを用いて、単元の学習への見通しをさらに具体的にたせるとともに、自己課題の設定を行った。以下は生徒が記述した実際のプロジェクトシートである。

制 作	情報・解決策	計 画	ビジョン (自己課題)	準 備	振り返り	再構築	プレゼン (実践)
一番伝えたいことは?	自己課題の解決に必要な情報は?	そのために学習する必要のあることは?	具体的に何を目標にする?	プレゼンは何のために行うの?	この単元で得たことは?	どこを変える必要があるか?	誰のために?効果的に伝えるには?
「一番伝えたいことは?」	「自己課題の解決に必要な情報は?」	「そのために学習する必要のあることは?」	「具体的に何を目標にする?」-自己課題	「プレゼンは何のために行うの?」	「この単元で得たことは?」	「どこを変える必要があるか?」	「誰のために?効果的に伝えるには?」
「一番伝えたいことは?」	「自己課題の解決に必要な情報は?」	「そのために学習する必要のあることは?」	「具体的に何を目標にする?」-自己課題	「プレゼンは何のために行うの?」	「この単元で得たことは?」	「どこを変える必要があるか?」	「誰のために?効果的に伝えるには?」

この生徒は、自己課題を「自分の意見を相手にしっかりと理解してもらい説得できるようにするためには何が大切かを学び、活用できるようにする」としている。

次の3時間目では、上のプロジェクトシートにおける「計画」「情報・解決策」に記述したことに即して、プレゼンの計画を立案し、インターネットを用いて情報収集を開始した。

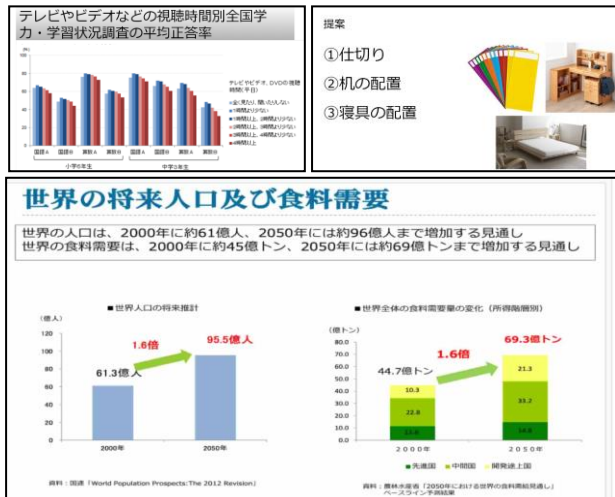
4時間目では、実際にプレゼンの作成に入った。今回のプレゼンのテーマは、以下の6つからの選択とした。

- ①理想の部屋
- ②災害への対処法
- ③観光すべき国
- ④持続可能な社会のために
- ⑤学力を向上させるには
- ⑥旭川の街づくり

これらの選択肢を用いた意図は、生徒の実生活から近いものと遠いものの両方を示し、個々の実態に応じて選べるようにするためである。

本実践で用いた Google スライドの扱いに関しては、技術分野や英語科など、様々な教科等を通じて慣れているところである。したがって、自らの伝えたいことを明らかにして話を組み立てる(構成する)ことに加え、シートのデザインや視覚効果などにもこだわりをもって取り組む様子が多く見られた。

以下は、生徒が実際に作成したプレゼンシートの一部である。



なお、作成にあたっては、プロジェクトの「制作」のフェーズにある「一番伝えたいことは？」という問いを意識しながら行った。

こうしたプレゼンシートの作成を3時間続け、最初から最後まで一通り完成させた後、3~4人の小グループでのプレゼンテーションを行った。



そこでは、ただ一方的に発表するのではなく、一人一人の発表後に、そのプレゼンの出来についてグループのメンバーで対話しながら検討する時間を設けた。これは、制作に対する粘り強さを培うべく「再構築」のフェーズを大切にしたいと考えたためである。

その後、プロジェクト型の学習プロセスには組み込まれていないが、各グループから代表者を選出し、教室全体でのプレゼンを行った。より多くのオーディエンスの前でプレゼンすることに慣れさせることが目的である。

最後に、「振り返り」を行い、本単元を終了した。以下が、振り返りの項目と生徒の記述である。

振り返り	
この単元で得たことは？	<p>1. 意味や価値を感じながらプレゼンを作成できた。 自己評価：(4)(3)(2)(1)</p> <p>2. 自分の立場や考えを明確にしてプレゼンできた。 自己評価：(4)(3)(2)(1)</p> <p>3. 意見と根拠を分けて自らの考えを提案できた。 自己評価：(4)(3)(2)(1)</p> <p>4. この学習活動全体を通して、特に身に付いたことは？</p>
身に付いたこと	<p>制作して発表する中で、自分の考えを明確にしてプレゼンできた。また、自分の立場や考えを明確にしてプレゼンできた。また、自分の立場や考えを明確にしてプレゼンできた。また、自分の立場や考えを明確にしてプレゼンできた。</p>

振り返りの最後には、「この学習活動全体を通して、特に身に付いたと思うことは？」と問うた。その回答には以下のようなものがあつた。

- 自分の提案や考えを人に分かりやすく伝える力
- シナリオ通りに話す部分と、場の雰囲気を見ながら柔軟に話す部分を見分ける力
- 相手に伝えるための根拠を考えたり、熱意のある話し方をしたりする力
- スライドを作成する技術

生徒自身が身に付いたと認識している力は、非常に多岐に渡っていることが分かる。上の記述を子細に見ると、話すことの「知識・技能」に関わる力と、「思考・判断・表現」に関わる力がバランスよく培われたと捉えてよさそうである。また、各フェーズにおいて生徒が自分自身の学びをメタ認知しながら学習を進めてきたことも、上の記述から見て取ることができる。

6. 今年次研究の成果と課題

本校国語科では、今年次研究の主題を「自ら課題を設定し、知を築く生徒の育成」と掲げて研究をスタートさせることとした。

本稿では、これまで2年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題、および今後の展望を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校国語科の2年次研究では、副題を「他者と関わりながら、自ら学びを進め深める方略の研究」とし、自己の学習を各段階において適切に把握し、かつその中で適宜他者と関わりながら学びを進め、深めることのでき

る生徒の育成を目指した。

そうした考え方のもと、多くの単元を、前年次の研究でも取り組んできたプロジェクト型の学習プロセスに即して設計し、その各フェーズにおける個別の学習活動に適宜対話場面を設けることを研究の軸としてきた。

2年次では、プロジェクト型の学習プロセスにおいて、特に各フェーズでの「問い」を精選することを心がけた。その結果、単位時間どうしのつながりがより一層スムーズになり、同時に生徒の学びにもつながりがもたらされ、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の確実な高まりを促すことができたものと思われる。

また、前述の通り「プレゼン」「再構築」のフェーズに対話場面を設けることで、他者との差異の中で自らの制作したプレゼンを見つめ直し、改善へとつなげることができた。このことは、他者との対話が、新たな智慧や価値を生んだということに他ならない。

おそらく社会においても、あるプロジェクトを遂行し成功させるためには、他者との協働が欠かせないファクターとなる。だとすれば、本実践における単元の設計は、ひいては生徒の社会生活にまで転用することができるものであるということができると考える。

6. 2. 研究の課題と今後の展望

以上の成果があった2年次研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

①「主体的に学習に取り組む態度」の育成や見取り

前述のように、本実践においては、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の高まりを確実に促すことができた。その一方で、「主体的に学習に取り組む態度」がどのように高まったかを確認することに課題があると捉えている。どのような姿が表出した時、「主体的に学習に取り組む態度」が高まったといえるのか。また生徒自身が自分の学びをどう調整した時、「主体的に学習に取り組めた」と判断できるのか。その辺りの整理をつけなくてはならないと考えている。

「主体的に学習に取り組む態度」の要素は、一般的に「自己調整の側面」と「粘り強さの側面」と整理されているが、その具体をしっかりと捉えることの必要性を強く感じている。それが、「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価し、またその態度を育てるための指導に生かされていくものと考えているためである。

②ICTのより効果的な利活用

本実践においては、主にgoogleのchromebookを用いて学習を進めた。プレゼンのスライド作成から交流・発表に至るまで全てをchromebookで行っている。

ただ、chromebookを「使用」したものの、それが「十分な活用」の域にまでは達していないのが現状ではなかろうか。情報を収集したり整理したりする場面や、他の教科(例えば英語等)で蓄積された学習の内容を参照したりする場面等においては、ICTを活用することができたといえる。しかしながら、考えたことや作成したものを教室の内外で表現・共有する場面においては、うまく活用できているとはいえない(これこそがICTの肝であるといえるにも関わらず、である)。これが目下の課題であるといえよう。

以上2つの課題から見えてくるのは、今日の教育の重要なトピックでもある「個別最適な学び」に向かう必要性である。

このことについて学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えたとともに、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要であると述べられている。

また、中教審答申における「令和の日本型学校教育」の構想(2021)においては、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つの側面に整理しており、そのうち「学習の個性化」については、「一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」とある。

以上のことから、今後の本校における国語の研究においては、「学習の個性化」として「主体的に学習に取り組む態度」を高めるべく質の高い学びを保証するとともに、より効果の高いICTの利活用について考え、実践していく必要があると考える。

注釈

*1 文部科学省。「学習指導要領解説 総則編(2019年7月)」.p79

*2 石井英真(2017)「アクティブ・ラーニングを超える授業」。日本標準. p15

*3 詳しくは、北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(68)」に述べている。

*4 プロジェクト学習の理論と手法については、鈴木敏恵(2012)『課題解決力と論理的思考力が身に付くプロジェクト学習の基本と手法』に基づいている。

*5 この「連続性」の詳細については、北海道教育大学附属

旭川中学校、「研究紀要(69)」の総論に述べている。

- *6 鈴木敏恵(2012)では、本稿でいう「単元」を「基本フェーズ」「プロジェクト」「プロセス」等と呼んでいる。
- *7 この「問い」に関しては、鈴木敏恵(2012)は「コーチング」を称しているが、これも本校の実態等に応じて用語を変えて用いている。
- *8 時事通信社編。「内外教育」.2021.p15
- *9 教育調査研究所編。「教育展望」.2018.p29

(20)時事通信社編。「内外教育」.2021.p15

(21)中教審答申。「令和の日本型学校教育」.令和3年1月26日

参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(68)」
- (4)中央教育審議会。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月)」
- (5)文部科学省。「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (6)佐藤学。「質の高い学びを創る 授業改革への挑戦」. 東洋館出版社. 2009
- (7)田中耕治。「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」.2011
- (8)鈴木敏恵。「課題解決力と論理的思考力が身に付くプロジェクト学習の基本と手法」. 教育出版. 2012
- (9)河野順子。「言語活動を支える論理的思考力・表現力の育成」. 溪水社.2013
- (10)溝上慎一。「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」. 東信堂. 2014
- (11)「読み」の授業研究会編。「国語科の『言語活動』を徹底追究する 学び合い、学習集団、アクティブ・ラーニングとしての言語活動」. 学文社. 2015
- (12)梶田勲一。「アクティブ・ラーニングとは何か」. 金子書房.2015
- (13)松下佳代。「ディープ・アクティブラーニング」. 勁草書房.2015
- (14)西岡加名恵/石井英真/田中耕治。「新しい教育評価入門 人を育てる評価のために」. 有斐閣コンパクト.2015
- (15)石井英真。「アクティブ・ラーニングを超える授業」. 日本標準. 2017
- (16)奈須正裕。「『資質・能力』と学びのメカニズム」. 東洋館出版社.2017
- (17)教育調査研究所編。「教育展望」.2018
- (18)北村友人, 佐藤真久, 佐藤学。「SDGs時代の教育 すべての人に質の高い学びの機会を」. 学文社. 2019
- (19)文部科学省教育課程政策課編。「中等教育資料(令和元年10月号)」. 学事出版. 2019